

《翻 訳》

William Blake : The Poems by Nicholas Marsh

宮 町 誠 一

第5章 ブレイクの生涯と作品

ブレイクの生涯

本章はブレイクの生涯に関する簡潔な解説である。主な出来事は簡潔に述べられているが、ブレイクの友人関係と諍い、受けた嘲りや発した侮蔑、仕事の受注関係、彼の芸術における期待と失望、崇拜者と誹謗者などが関わる複雑な事情は非常に入り組んでおり、本章のスペースでは対応しがたい。詳細な伝記作品は読み応えのあるものであり、その中で3つの伝記が本書の最後の「今後の読書リスト」に掲載されている¹。

ウィリアム・ブレイクの生涯に関わる大まかな事実は、彼の人生の方向性を示している。ブレイクは、ロンドンの現在のソーホー地区である、ゴールデン・スクエア、ブロード通り28番地にあった家で、1757年11月28日に生まれた。父親、ジェームズ・ブレイクはその家の1階で衣服関係の雑貨を扱う商人であった。ウィリアム・ブレイクは70年余りの生涯を全うし、ストランド通りから少し外れたファウンテン・コート3番地の2階の住居で、1827年8月12日に亡くなった²。

10歳の時ブレイクは絵画教室に通い、14歳になって彫版画師ジェイムズ・バシアに弟子入りしている。20歳の時に修行を終え、彫版画師として生活費を稼ぎ始めた。同時にロイヤルアカデミー³の生徒になった。彼は生涯を通じて彫版画師として不安定で、しばしば赤貧の生活を余儀なくされたが、亡くなるその日まで仕事を続けていた。ブレイクが24歳の時、キャサリン・バウチャーと結婚した。二人には子供はいなかった。そして45年後、ブレイクが亡くなる際に妻が付き添っていた。1800年から1803年に渡ってサセックス州の村フェルパムのコテッジで暮らした3年間を除いて、ブレイクは生涯をロンドンで過ごした。

誕生と逝去、商売と結婚の「限界」を示すブレイクの生涯に関するこの大雑把な枠組みは、彼が生涯ロンドンの人であり、わずかな収入のために絶えまぬ労働を重ねた人生を歩み、子供には

恵まれなかったが、ブレイクと妻は二人でほぼ半世紀を生きたことを物語っている。しかしながら、ブレイクが「普通の」生活を送ったと結論するのは間違いだろう。もう少し詳しく見てみると、ブレイクの性格が子供の時期でさえも並外れたものであり、彼の生きた時代が実に波乱に富んだ時代だったことに、そしてブレイクの見解や行動が常軌を逸していたことに目を見張ることになる。ブレイクの時代の歴史に関する際立った特徴をまとめることから始めたい。

歴史的状況

アメリカ独立戦争

詩人が18歳の時に英国はアメリカ独立戦争（1775-83）に巻き込まれ、北アメリカの13の植民州が英国の支配に反旗を翻し、アメリカ合衆国を建国した。この紛争はアメリカの反逆者に加えて、英国はフランス、スペイン、オランダ共和国と戦闘状態になるまで拡大し、英国陸軍は悲惨な敗北を続けた。貴族階級の士官に率いられた誇り高い国王の陸軍が、繰り返し一群の植民地軍に敗北したことは軍事的には屈辱的なことであった。その戦争は経済的にも非常な痛手となり、英国の資産を枯渇させることになった。スペインとフランス、オランダとの戦いに加えて、アメリカ13植民地の喪失は貿易の縮小と富の減少を意味した。ブレイクは、アメリカ大陸における戦争を自由の勝利とみなし、ヨーロッパ大陸における革命の継承と考え、それらを称えて、「強直した戦慄が天の諸王座をゆすった！フランス、スペイン及びイタリアが、恐怖のうちにアルビオンの一党を見やった」（『アメリカ』16版、11.16-17）⁴と表現した『アメリカ：一つの予言』（1793）を著した。

ゴードン暴動

1780年6月、プロテスタント協会の会長であるジョージ・ゴードン卿はデモ隊を組織し、国会に向けて行進し、嘆願書を提出した。彼は1689年以来法律となっていた反カトリックの法令を撤廃した1778年のローマカトリック条例の撤回を要求した。このデモ行進はいわゆる「ゴードン暴動」の幕開けとなった。この暴動は秩序回復のために軍隊が動員されるまで1週間続いた。兵士たちは250人を射殺し、400人以上に傷を負わせた。数多くの家屋や商家が襲われ、略奪にあり、暴徒がニューゲイト監獄に乱入し、内部が焼かれ、囚人が解放された。表向きの原因はゴードン卿の反カトリックの抗議行動であったが、結局は激しい怒りを爆発させることになった。実際のところ暴動は複数の不満の発露となり、非常に多様な不満と革命的目的が同居していた。当時の英国は問題を抱えた不満分子の巣窟となっており、政治家と、皇族、貴族階級と教会という体制派が、自由主義の理念、貧困、急激な経済的、社会的な変化、そして宗教上の論争が逆巻く世情に蓋をすることは非常に難しかった。ブレイクの伝記作家であるアレクサンダー・ギルクリスト（ロンドン、1888）はブレイクが群衆に押し流され、ニューゲイト監獄襲撃の先頭に「無理に」立たされていたと語っている⁵。ブレイクは自ら進んで参加していた可能性が高いと考える研究

者もいる⁶。

産業革命

伝統的生活様式の消滅が大々的にそしてあらゆる分野で進む中で、いわゆる産業革命がブレイクの生涯を通じて拡散していった。彼の少年期や青年期には、運河の連絡網が張り巡らされ、ロンドン、ミッドランド、北部では小規模の製造所や大規模の工場が林立し、ロンドンの人口は倍増した。国王とその軍隊がアメリカでの戦闘を続ける中、ワットが蒸気機関を完成させ(1778)、アーカライトの繊維機は繊維産業に革命をもたらしていた。職を失った職人が新しい工場で働くために、都市に集中し、新しい街、新たな貧民街、新しい不衛生の状態、新たな感染症、そして新たな疫病を生み出していた。ブレイクが1790年に引っ越したラムベスの新しい家は田園の中に建っていた。十年後に引っ越したときには、急速に都会の貧民街となる市街地に囲まれていた。19世紀になると変化の速度はますます加速の一途を辿った。そして社会内部の重大な緊張関係と重荷が1811年から1813年にかけて発生した工場に対するルディッチの襲撃のような暴力的な対立へと繋がっていった。それらの暴動は軍隊によって制圧されたが、1812年から1813年にかけて開廷されたヨークでの裁判の結果、被告たちは処刑されるか国外追放となった。他の事例も提示できるが、産業革命について認識すべきもっとも重要な点は、すべてが変化せざるを得なかったことである。経済的に、社会的に、政治的に、文化的に、視覚的に、建築の分野でも、事実上、あらゆる面で変化を受けたのである。その影響をいくら強調してもし過ぎることが出来ないほどであった。その変化は、人類の歴史において最も広範な影響を及ぼした出来事の一つとして、狩猟採集の生活をしてきた人間が定住する農耕者になった変化に匹敵するものであった。工場や産業の「奴隷的状态」の拡散に対するブレイクの反応は、第2章で分析したパウラフーラの記述の中に具体的事例を見ることが出来る。

フランス革命

ブレイクの生涯の中で最も意義深い唯一の出来事は、1789年のフランス革命であった。この出来事の衝撃的な重要性と、フランス発の報道が世界中に与えた衝撃波の重要性もいくら強調してもし過ぎることがない事件であった。フランス革命はヨーロッパにおける最も強力な君主国家のひとつがその国民の手によって打倒され、国王と女王が処刑され、憎悪の対象であった貴族階級が組織的に抹殺された事件であった。アメリカの解放以上に、フランスにおける革命は更なる変化を必要とし、延び延びとなっていたが、緊迫した変化の雰囲気をかもし出した。ブレイクはこれらの出来事を作品『アメリカ 一つの予言』(1793)、『ヨーロッパ 一つの予言』(1794)の中で称え、自らの預言書的な神話の中に組み込んだ⁷。しかし、その文脈を十分理解するには、当時の英国におけるますます不安定化する政治風土と、フランス革命がその後の英国の展開と改革に与えた破滅的な影響を理解する必要がある。

英国の体制側がいかにも恐怖で動揺していたかを認識することは重要である。それは急激で不安定な変化の時期であり、改革への扇動があり、急進的な新しい理念がアメリカやヨーロッパから流入していた（例えば、1762年にはジャン-ジャック・ルソーの『社会契約説』⁸や1791年には植民地入植者であったトーマス・ペインによる『人間の権利』⁹など）。特にロンドンにおいては、急進的な政治家、知識人の集団や、独立的志向と英国国教会に対する宗教的な不服従という強固な伝統もあった。例えば、1780年代の英国を見てみると、歴史家であれば様々な改革や、より大きな平等、そして多分、より広範な選挙権を予想しただろう。しかし、現実にはそれらの動きに対する弾圧があった。革命がフランスから英国へ広がることを恐れた体制派は、反動的で抑圧的な手段で対抗し、すべての遅れていた改革計画を中断へと追いやった。自由を拡大する代わりに、検閲と治安破壊行動と反逆罪に対する裁判の波が押し寄せていた。この反動的で異常な興奮が、多分1803年の反逆罪に問われたブレイクの裁判を引き起こしたのだろう。

一部の進歩的な政策の立案者たちは、これらの新しい出来事の重圧の中で度胸を失ってしまったように思える。1776年に最初の議会改革法案を上程した一匹狼の国会議員ジョン・ウィルキーズでさえも、1780年にゴードン暴動鎮圧のために兵士の一团を指揮した時には民衆の支持の大半を失っていた。国会議員のエドモンド・バークも、国王の執行権に異議を唱え、アメリカの植民地の住人を声高に支持していたが、フランス革命を「怪物の世界」¹⁰と見なし、それ以降次第に保守的になっていった。この反動的な動きは、戦時にはいかなる改革も成されないものであるが、ナポレオン戦争によって長期化し、ワートルローにおけるナポレオンの最終的な敗北（1815）の後もしばらく続いた。例を挙げると、1819年にはマンチェスターの聖ピーターズ・フィールドにおける「ピータールー」の殺戮では騎馬隊が改革を求める群衆に対して襲い掛かり、多くの人を殺害し、負傷させた。そして政府はいかなる急進的な動向や理念に対して弾圧を続けていた。19世紀の改革法案の最初の法律が可決されたのは、ブレイクの死後4年後の1831年になってのことであった。30年から40年間も、英国における改革が遅れをとったのは、フランス革命に対する体制派の恐怖がその大半の原因となっていた。そういう訳でブレイクの人生は反動的抑圧と恐怖のあまり、結果的には独裁的体制の下で過ごすことになった。さらに、ブレイクの生涯を通じて、一方では進歩への欲求と他方では反動的な抑圧、この二つの間の緊張が増幅するばかりであった。

ブレイクの家族

ブレイクの生涯に立ち戻って、詩人の家族関係を見ておこう。ウィリアムには1753年生まれの長兄のジェームズがおり、家業の衣服店を引き継ぎ、経営を担っていた。兄はともすると気まぐれな弟に助言を与える傾向にあったことが伺えるが、大人になってからは殆ど関係がなかったようである。しかし、1809年には絵画作品の展示会場としてブロード通りにあった自分の店を提供していた。またブレイクには3人の弟と妹がいた。ジョンは成人したが、消息不明となって

いた。結局入隊し、若くして命を落としていた。妹のキャサリンは末っ子であった。彼女はその生涯の大半を兄ジェイムズと過ごしたが、一時期ブレイクと生活したこともあった。ブレイクの妻とは折り合いが悪く、その共同生活は短時間で終わり、妹は兄ジェイムズの家に戻った。ブレイクよりも10歳年下のロバートは詩人と心が通じていた唯一の兄弟であった。ロバートも幻視の能力があり、芸術家としての野心も抱き、ブレイクとその妻と同居していた。しかし彼は肺病持ちであった。ブレイクは1787年に没するまでロバートの介護を続けた。それ以後生涯を通じて、ブレイクは19歳で亡くなった愛情を寄せていた弟と、「魂を通じて」しばしば語り合ったと述べていた。

ブレイクがどちらの両親に対しても深い感情を抱いていたかを判断することは難しい。ブレイクはいかなる形であれ抑制や権威を嫌っていたが、両親はその子育てにおいてより柔軟性とそしてより深い理解を示していたように思える。父親はブレイクの芸術家としての野心に対してかなりの資金的援助を与えていた。しかしながら、彼の両親は息子の結婚には反対し（キャサリンは身分の低い「召使」階級の家柄であった）、それ以降、ブレイクは実家とは疎遠になっていたようである。ブレイクの父親は1784年に、母親は1792年にそれぞれ亡くなった¹¹。ブレイクの幼少時代は葛藤が多かったと考える多くの研究者は、彼の詩作品に見られるように、家父長的権威を代表する人物に対する詩人の生涯変わらぬ嫌悪感や、所有欲旺盛で激しい「母性的な」愛に対する同じような赤裸々な嫌悪感を、彼らの理論の根拠としている。

幻視

ブレイクには幼少の頃から幻視の能力があったことは明らかである。4歳の時に神が「彼の頭を窓に押し付け」、ブレイクが叫び声を挙げたという記述がある。また、同時期にロンドン周辺の草原で干し草作りの農夫に混じって歩いている天使を見たという記述も残っている¹²。父親はこの奇妙で我の強い子供は学校に送るべきではないと判断したようで、家で読み書きを教えた。ブレイクが10歳の時に絵画に対する彼の情熱を認めて、パーズの絵画塾に籍を置くことになった。14歳から21歳にかけてブレイクは彫版画師の見習い弟子であり、21歳から27歳まで王立アカデミーで学んだ。当時ブレイクは視覚芸術の分野で学んでいた。しかし、他のあらゆる分野でも自学自習していた。

ブレイクが生涯を通じて見続けた「幻」は、伝記作家や批評家による大量の理論、解釈、説明の題材となってきた。ブレイクの幻視に対する殆どすべての対応が修正され、議論の対象となり、実に様々な信憑性と不信に関わる議論がなされてきた。「幻視」はブレイクにとっては新しい理念や洞察を説明する手段であるとする解説者もあり、彼らはブレイクが恍惚の境地で描いたとされるヴァレリーの「幻視上の頭部」（後にその対象は増えるのであるが）は、占星家を芸術家が揶揄している事例であると主張している。他の解説者は説明のために臨床心理学の分野にまで立ち入り、ピーター・アクロイドは「直感像」に言及している¹³。

実際のところ、ブレイクは信憑性を疑わない仲間にも懐疑的な連中の中でも常にこれらの幻視の真実性を強調していた。同時に、ブレイクが伝えていた「幻視」は、理性的な視点から見ても洞察力に優れた理性的な啓示であったことは注目に値する。また、第2章の「幻視」に関わる議論の中で、ブレイクの理念において視覚の異なる働きが重要な役割を担っていたことを指摘してきた。詩人の伝えられている生涯の中で、数多く現れる階段に立っている天使や他の亡霊のような存在に関する物語を受け入れようが、拒絶しようが、ブレイクの理念としては理解可能である。その議論の中で、ブレイクは、幻視の瞬間には彼の周囲の環境、「自由主義的」つまり感覚的な現実を連続性の元で意識していると主張していることを指摘してきた。

我々自身の視点を調整することも重要である。現在の世俗的時代においては、幻視は精神の病の証左として扱われている。逆に、ブレイクの時代においてはある種の「幻視者」の存在は一般的であった。ロンドンでは宗教と政治の分野において権威に異を唱える分派や狂信的な人物の集団で賑わっていた。ブレイクの同時代の人々の反応に接してみると、ブレイクが「幻を見た」という事実と異を唱える人は殆どいなかったことも注目に値する。ブレイクが狂気の状態にあったと考えた人も、ブレイクの幻視の事実ではなく、彼の幻視の内容が狂気であると考えたからであった。言い換えるならば、人々はブレイクの幻覚そのものではなく、彼の見解に異を唱えたのであった。

仲間、友人、パトロン達

ブレイクは決して「積極的に集団に加わる人」ではなかった。ブレイクは宗教的組織や政治的団体に心酔して、あるいは長期に渡って関わるにはあまりに自我意識が強く、皮肉な視点の持ち主であった。ブレイクはスエーデンの靈感溢れる哲学者であったスエーデンボルグの著作を読み、1789年から翌年にかけて妻と共にグレイト・イースト・チープにあったスエーデンボルグ新ジェルーサレム教会に集っていた。しかしこの新しい教会が組織宗教の陥穽に陥り始め、神父を任命し、豪華な法衣と権威を纏うようになると、ブレイクはスエーデンボルグを公然と非難した。スエーデンボルグは『天国と地獄の結婚』の中では、「墓石に坐っている天使である、彼の著作は折りたたまれた亜麻布である」¹⁴と言われて登場している。ブレイクが彼とは袂を分かったということを明白に示している。スエーデンボルグ派の信者としてのこの短期間を除けば、ブレイクは他のいかなる既存の宗派を信奉したことはなかった。彼の宗教は彼自身のものであり、独創的なものであった。

不正や残忍さに対するブレイクの怒りに関する逸話は数多く存在する。ブレイクはそれらを目撃したときに黙認することが出来ず、しばしば介入し、公然と非難し、抑圧されている人々の側に立って、巷で抑圧者を脅かした。1790年代のブレイクは、著名な共和主義者の出版者ジョセフ・ジョンソン¹⁵の下で彫版画師として、そして挿絵画家として仕事をしていた。この書籍商はメアリー・ウールストンクラフト¹⁶やトーマス・ペインを含む、明白に反体制派であり、革命擁護派

の作家たちの作品を出版していた。ブレイクはウールストンクラフト、ペイン、その他の急進的な作家と面識があり、自分自身の革新的内容の詩の出版をジョンソンに勧めていた。しかし、ブレイクはこの急進的なグループの一員となることはなく、政治的な手段で社会的、政治的改革を進める運動に参加するようなことはなかった。ニューゲイト監獄が襲われた、1780年のゴードン暴動の現場には立ち会っていたし、直接加わっていたかもしれないが、ブレイクの社会的行動への係わりの大半はいかなる組織とも無関係であり、女性や子供が殴打されるのを目撃し、彼らを擁護するために介入した時に限られていたように思える。一方、ブレイクの政治的見解は大半の同時代の人々のものより急進的で先見性のあるものであった（第3章における議論を参照）。

ブレイクの人生において友人関係（そして友人との争い）は数多くあったが、殆どは彼の芸術活動と野心と関係があった。ブレイクが関わった集団や仲間たちの解説を手始めに、彼の主要な人間関係に関する解説を簡潔にまとめておきたい。

聖職者のマッシュとその夫人は詩人と芸術家のパトロンであり、彼らの居間は発表や会話のための集会場であった。ブレイクは、短期間ではあるがこの経済的に恵まれたサークルの一員であった。その居間でブレイクは自分の抒情詩を自分で節をつけて歌っていた。夫妻はある種の情熱を持ってブレイクを評価し、処女詩集『詩的素描』の出版の費用の一部を援助していた。しかし1787年ごろ、詩人とマッシュ家のサークルとの間で不和が生じ、ブレイクは現在、詩作品「月の島」と呼ばれている個人的原稿の中で激しく彼らを皮肉っている。

ブレイクが共和主義者の作家トーマス・ペイン、急進派の書籍商ジョセフ・ジョンソン、メアリー・ウールストンクラフト、そして他の共和主義者の活動家との関係についてはこれまでに言及してきた。しかし、ブレイク自身は政治的に活動したことがなく、彼のこの時期に書いた革新的内容の「預言書」、つまり、『天国と地獄の結婚』を含めた『フランス革命』、『ヨーロッパ』、『アメリカ』は公に出版されたが、市販されることはなかった。従って、ジョンソンや他の作家たちが90年代後半に逮捕、投獄されたが、ブレイク自身は影響を受けなかった。しかし、彼はそのグループとの関係を巡って官憲の取調べを受けることを恐れていたことは明らかであった。1803年においても、反逆罪（下記参照）の訴追に自己擁護している際も、ブレイクは急進派と知られたゆえに官憲による「畏にはめられた」のではと心配していた。

1818年、60歳になったブレイクは20代半ばで評判の高かった画家、ジョン・リネルと出会っていた。彼との晩年の10年間続いた友人関係を通じて、ジョン・ヴァーリィと自らを「古代人」と称していた、熱心で、伝統には拘らない若い芸術家のグループと出会い、友人関係を築いていた。

ヴァーリィはブレイクよりも20歳ほど若く、著名な水彩画家であり、教師でもあった。彼は大柄で、かなり金遣いの荒い男で、手相占い、占星術、神秘主義などの如何わしい似非科学に熱意を傾けていた。ブレイクとリネルはヴァーリィと共に交霊会に参加し、ブレイクが「幻視」の状態に入って死者の霊の人物像を描くこともあった。これが「幻視による頭部」として知られる一連の絵画が生まれた経緯である。ブレイクは「幻」を想像力の常在の内なる眼として理解して

おり、交霊会、恍惚状態や他の神秘主義的、占星術的装置に基づくヴァーリィの信念とは明らかに異なっていたが、互いに喜んで協力し合っていたようである。ブレイクが本当に見たままを描いていたのか、あるいは信じ易い友人をからかい、騙して皮肉を込めて楽しんでいたのかは伝記作家の間でも見解が分かれている。

詩歌、絵画、想像力、幻視能力の向上を求めてロンドンで月例会を開き、徹夜の会合を持つためにしばしば田舎を散策していた「古代人」たちは、ブレイクの才能と幻視能力の熱烈な信奉者であった。彼らはブレイクをある種の師匠、あるいは「預言者」と捉えて、頻繁に彼の元を訪れ、質問を重ね、彼らの会合や遠出に参加するように促した。ブレイクはついに獲得した認知に対して満足していたに違いなかった。若者たちが仕事に支障をきたすほど頻繁にファウンテン・コートを訪ねていたが、ブレイクは忍耐強く、優しく接していたようだ。「古代人」たちは軽率な熱狂者の集まりでもなく、彼らは才能豊かな若者の集団であった。現在ではブレイクは彼の生涯を通じて出会った誰よりも才能に恵まれた天才であると認識されている（多分彼と面識があったコールリッジを除いて）。「古代人」の中で、多分現在でも良く知られている唯一の名前は芸術家であり詩人でもあったサミュエル・パーマーだろう。しかし、今日では殆ど無名であるが、エドワード・カルバート、ジョージ・リッチモンド、オリバー・フィンチ、ヘンリー・ウォルター、そしてフレデリック・テイタムは19世紀の芸術界では名を馳せるようになっていた。

ブレイクの生涯の異なる時期に一時的に彼の周りにいた友人、知人とは別に、長きに渡って交友関係を深めた人々も少数いた。その中で最も重要なのはトーマス・ストッサード、ジョン・フラックスマン、ヘンリー・フセリーであり、最初の二人はブレイクと同世代であり、フセリーは若干年長者であり、3人とも芸術家であった。加えて、トーマス・バッツとウィリアム・ハイリーは経済的に困窮した時期にブレイクを支えた重要なパトロンであった。そして、ヴァーリィと「古代人」との関連で言及した年若い芸術家ジョン・リネルがいた。

ストッサード、フラックスマン、フセリーは20代の頃からの親しい友であり、ブレイクの才能の信奉者であり、概ね彼の生涯を通じての友人であり、支援者であった。言い争いがあり、ストッサードとは1807年に友人関係は破綻していた。彼が『カンタベリーの巡礼者』のアイデアとデザインをブレイクから盗用したようである（少なくともブレイクはそれは盗作であると信じ、そのことで彼を責めていた）。若いとき、フラックスマンとフセリーはブレイクをパトロンに紹介したり、作品に対する手数料を支払って、かなりの援助を与えていた。しかし、1803年にフェルパムから戻った後は、友情関係は冷え込み、ブレイクの荒々しさや狂気じみた言動に対して、他の人々に謝罪の言葉を述べるような関係に陥っていた。彼らとも言い争いや反発があったが、ブレイクとストッサードとの完全な友人関係の破綻には至らなかった。これらの友人関係すべてに関する最後のコメントとしては、彼らはブレイク自身よりも商業的にははるかに大きな成功を収め、安定した生活を達成し、当時の一般大衆から一定の評価を獲得していた。

トーマス・バッツは富裕な公務員であった。彼は1799年ごろブレイクとの親交を得て、二人

の間だけでなく、しばしば相互に訪問しあい、会食を共にして彼らの家族を含めた固い友情関係が築かれていった。トーマス・バッツは見識のあるユーモア溢れる人物であったようである。彼は可能な限りブレイクに作品の製作を委託し、収集し、彼の家をブレイクの作品で一杯にしていた。20年間に渡るバッツの委託料と作品の購入代金、そして経済的に困窮していた芸術家に対する「内金」としての前払い金が、当時最も偉大な詩人を誰の手も借りずに、困窮から救っていたと言っても言い過ぎではない。バッツ氏には負うところは決して小さくはない。

ウィリアム・ヘイリーもまたブレイクに経済的にかなりの援助を提供したパトロンであった。彼は世間的に認められた詩人であったが、現在では感傷的で、二流以下と見なされている。話によると、ヘイリーは自分が面倒を見ている被扶養者に対するパトロンとしての役割を楽しむ、かなりうぬぼれの強い人物であったとされる。彼は確かにブレイクが気に入り、彼の芸術的才能を賞賛していたようであるが、詩人とこのパトロンの関係はしばらくすると気まずいものとなった。

フラックマンが1800年にヘイリーとブレイクを引き合わせ、彫版画の仕事の委託の段取りをつけた。同年の9月にブレイク夫婦は、芸術家とその雇用主の近くに居れるようにとヘイリーの屋敷のあるフェルパムの村にある家に引っ越した。多くの熱意と理想主義がこの田舎への引越しには込められていた。そしてヘイリーとブレイクは、前者の書齋で非常に多くの時間を一緒に過ごし、様々な委託仕事をこなし、芸術や詩歌について議論を交わし、ヘイリーはブレイクにギリシャ語の読み方を教えた。しかし、ブレイクの滞在中に、ヘイリーはブレイクの書き物は彼にとっては意味のないものに思えたので無視するようになり、ブレイクに対して商業的に有利な彫版画やデザインを強いるような圧力をかけるようになり、ブレイクのやり方を伝統に近づけようと圧力をかけるようになっていった。ヘイリーは明らかにブレイクを商業的に成功する手助けをしたいと思っていたが、彼の助言、見下したような態度、ブレイクの才能に対する過小評価は次第に強烈な反発を招き、やがて相互の非難の応酬となって爆発した。1802年を通してブレイク夫婦は耐え難くなってきた義務感と恩着せがましい態度から逃れる決心を固めつつあった。そして1803年の夏の終わりにロンドンに戻った。

ジョン・リネルは1827年に詩人が亡くなるまで、1818年からブレイク夫婦と親しい交友関係が続いていた。彼は委託注文を発注し、様々な知り合いを紹介し、経済的にブレイクを助けた。また彼は「前払いの注文」を定期的に依頼し、それは実質的には厳しい困窮からブレイクを救済するための財政的援助であった。ブレイクはリネル家を日曜日ごとに訪問し、その訪問は彼らがシレンセスターの家からハンプステッドのノースエンドに引っ越すまで続いた。ブレイクはハンプステッドまで徒歩で出かけてリネル家の人々と幸せな調和の中で一日を過ごすことが習慣となっていた。ブレイクは彼の訪問を楽しみにしていたリネルの子供たちに優しく、楽しく接していた。すでに言及したが、ブレイクを「古代人」たちやジョン・ヴァーリーに紹介したのもリネルであった。

ブレイクの暮らしはパトロンや委託注文や社会的な評価を求める長い、複雑な労苦の多い生涯

であった。ブレイクの友人や知人関係に関するこれまでの「概要」は必然的に極めて選択的なものであり、限られたスペースの関係から、ブレイクの希望や、書籍商、出版者や彼に仕事を発注した多くの他の人々に関する数多くのエピソードを必然的に削除せざるを得なかった。社会的な評価を希求する努力を続ける中で、ブレイクは明らかに彼に対して悪意を持って策を弄している輩が居るといった疑念を抱くこともあった。しかし同時に、ブレイクは自分自身の幻視とナイーブな楽観主義に子供のような喜びを感じていた。確かに、絶望の時期もあり、不合理な希望を抱いた時期もあった。彼の不安定な状況、子供に恵まれなかった結婚、にも拘らず、孤高の詩人としての立場にも拘らず、そして彼自身の気まぐれな気質にも拘らず、ブレイクを知る人々からの言葉には彼の優しさ、魅力、ユーモアが生涯を通して記されていた。

ブレイクの裁判

ここで言及しておくべき外来的な出来事があった。ブレイクの家を庭師の知り合いであったスコフィールドという兵士がフェルパムの家の庭に入り込んできた。ブレイクは出て行くように頼んだが、口論となり、結局彼が兵士を力づくで追い出し、しっかり押さえ込んだまま近くの旅籠まで連れてゆく出来事があった。スコフィールドによると、ブレイクは口論の最中も、旅籠までの道すがら大声で国王や国や国王の軍隊の制服を罵り、フランス軍が侵略し、それはもっともなことで、彼らが勝利するなどと言ったと訴えた。この時代はナポレオンとの戦争の危機が高まる中で、英国はフランス軍の侵略を恐れていた時代であったことを忘れてはならない。スコフィールドはブレイクを反逆罪と暴行罪で訴え、その罪状は死刑の恐れがあったので、長い間ブレイクの心配の種となり、1805年のチェチェスターでの裁判の決審まで続いた。

裁判沙汰になった直後、ブレイクはヘイリーが彼を「毘にはめる」ために兵士を唆したのではと勘ぐっていたが、ヘイリーが裁判では物質的にも心情的にも彼を支えてくれたので自分の疑念を後に後悔していた。ブレイクはまた1790年代にトム・ペインの共和主義者の一派と関係があったので官憲が彼を「毘にはめた」のではないかと疑っていた。しかし、当時一般的な社会的風潮であった恐怖に駆られた愛国思想を利用しようとした、喧嘩好きの兵士による単純な事件のようであった。

ブレイクは無罪放免となった。スコフィールドともう一人の兵士の証言が食い違い、ブレイク側の証人であったフェルパムのしっかりした信用しうる村人たちは、ブレイクの立派な人物像を証言し、彼を擁護した。ブレイクが実際に怒りに任せてこれらすべての国賊的な言葉を叫んだかどうか考えてみるのも確かに面白いだろう。これまで見てきたようにその見解はブレイクの信条とかなり一致しているのだから。この裁判は正義と真実の勝利と言えるのか、それとも誤った証拠の元での誤審だったのか。この些細な出来事がブレイク夫婦の生活にもたらした深い恐怖心についてより真剣に考えなければならない。ブレイクが無罪となり、その脅威が二人の生活から取り除かれた時に感じたであろう深い安堵についても同様に考慮の対象となるべきである。

ブレイクの作品

ブレイクは芸術家として、彫版画師として、数百枚に渡る絵画、彫版画作品、絵の下書き、スケッチ、版画の印刷物を残している。ここではこれらの作品に関する詳細な解説を述べることは出来ないで、彼の著作に限定している。ブレイクの視覚芸術作品の鑑賞に関心のある読者は、多くの主要な美術館で見出すことが出来る。例えば、英国ではロンドンのテイト美術館、英国美術館、ケンブリッジのフィッツウィリアム美術館であり、米国では『無垢と経験の歌』の作品が国会図書館やニューヨークのメトロポリタン美術館やプリンストンとハーバード大学の収蔵品を含む多くの図書館や美術館で見ることが出来る。

ブレイクはまた非常に多くの書き物を残している。彼はメモをノートにつけていたし、読んだ書物に注釈を加えていた。手紙も書いていたし、1809年の絵画作品の展示会用に書いた「解説付きカタログ」と『カンタベリーへの巡礼』（1810）の版画作品を宣伝する目的で書かれた「大衆への言葉」のような散文作品も残っている。これからの解説はブレイクの詩的作品に限定し、その中でも必然的に選別せざるを得ない。これからの解説では詩人が生活した場所についても言及しておこう。

ブレイクは1782年に結婚するまで、ゴールデン・スクエアのブロード通りにあった実家と、見習いの時はジェームズ・バシアの家で暮らしていた。10代から20代初期に書いていた幾つかの詩作品は、『詩的素描』というタイトルで1783年にマシュー婦人とそのサークルの援助を得てまとめられ出版された。詩人がほんの14歳の頃の作品を含むこれらの作品は、後の『無垢と経験の歌』、その多くの作品をこれまで検討してきたのであるが、その詩集に見られる躍動するリズムと結びついた率直で力強い文体を示していた。特に、よく知られている抒情詩「どんなに楽しく私は野から野へさまよい」と「気違いの歌」は今後の作品に期待を持たせる作品であった。

結婚後、ブレイクとキャサリンは父親が亡くなる1784年までレスターフィールドのグリーン通りに居を構えていた。同年にブレイクと妻は父親の店（その時は兄の店）の隣であるブロード通り27番地に引越し、過去に見習いの同僚であったパーカーと共同の印刷店を開業した。翌年にその通りの角を回ったポランド通りの家に引越し、1790年までそこで暮らした。1787年にブレイクの弟ロバートが亡くなったのはその家であった。そしてブレイクはロバートのノートにスケッチや警句的表現や詩を書き綴り、長年に渡って上下左右に拘らずそのノートに書き留めていった。

ブレイクが「レリーフ・エッチング」という手法を開発したのが80年代後半であった。その手法のおかげでブレイクは詩文とイメージを組み合わせ、彼の二つの偉大な才能を融合することが出来た。ブレイクの神話と「預言者的な」声の兆候に加え、言葉と絵画の両者を一体化して仕事をするという願望は、最初の預言書である『ティリエル』に見られ、大体1789年ごろに書かれたこの作品では12枚のペンと筆によるイラストを伴っていた。同時にブレイクは「レリーフ・エッチング」という新しい手法を2つの短い作品、『自然宗教はない』と『全ての宗教はひとつ』

で試していた。そこではそれぞれの図版が一連の議論を進める短い意見表明文を伴っていた。これらの作品はこの職人が彼の新しい手法を発展させるための実験的作品であったように思われる。同年ブレイクはその最終的様式に到達すべく預言書の最初の作品、『セルの書』を執筆し、彫版し、色付けしており、その直後に『無垢の歌』が続いて製作された（両作品とも1789年に印刷され、出版された）。

1790年にブレイク一家はヘラクレス・ビルディング13丁目にあるラムベスの家に引っ越した。その家には広めの庭がついていた。今日のロンドン住民にはラムベスが当時殆ど田舎風の地域であったことは想像するのが難しいだろうが、ブレイクたちは沼に隣接し、殆ど野原に囲まれた新たな開発地域に引っ越したのだった。そこで過ごした10年間の間に、ラムベスは広範囲に開発が進み、18世紀の末に彼らが立ち退いた頃には都会の貧民屈の様相を呈していた。1790年から1793年にかけて『天国と地獄の結婚』が書かれ、彫版され、印刷され、『経験の歌』も同様に出版されていた。このラムベスでの10年間の間に、ブレイクは「ラムベス預言書」として知られている一連の予言の書を執筆していた。それは『天国と地獄の結婚』で述べられたブレイクの約束を実行したものであると多くの研究者は考えている。

私は地獄の聖書を所有しており、世界が好むと好まざるに関わらず手にすることになるだろう。¹⁷

これらの作品は『ユリゼンの書』(1784)、『ロスの歌』(1795)、『アヘニアの書』(1795)、『ロスの書』(1795)であった。これらの作品が一緒になってロスとユリゼンとオークの神話を発展させ、更なる象徴的登場人物を、あるいはブレイクが言うところの「状態」を導入し、聖書の「創世記」に取って代わる創造の物語を語っている。同時に政治的預言書が執筆されていた。『フランス革命』(1791)に続いて、『アメリカ 一つの予言』(1793)、『ヨーロッパ 一つの予言』(1794)が書かれていた。

1793年に書かれた『アルビオンの娘の幻』は分類が難しい。その作品はブレイクの特徴的な神話的人物に関わるものであり、その物語には『アメリカ』あるいは『ヨーロッパ』に類する政治的要素を含んでいたが、中心的な関心は愛と性愛であった¹⁸。形式上はブレイクの7つの強勢を持つ共鳴感溢れる「7強勢」詩行で、対句法を大いに利用したものであったが、その作品は『ロス』や『ユリゼン』の預言書に近いものであった。多分それは『セル』から発展して生まれたものであって、経験と人生から逃れてきた恐怖に駆られた無垢な乙女に関する物語である（第4章における議論を参照）。

1795年にはブレイクは大きなそして複雑な「9夜にまたがる夢」として構想された作品で、これまでよりもはるかに長編で野心的な預言書を書き始めた。この作品には今後9年間に渡って執筆、彫版作業を続け、数限りないほどの変更と見直しを加え、一部を削除し、改作し続けた。

そうして現存している原稿も最終的な完成原稿ではない。この作品は『ヴァラ あるいは4つのゾア』であり、ブレイクの最終的な神話的、詩的創造作品としての3つの膨大な「預言書」の最初の作品であった。詩人はこの壮大な作業をフェルパムに転居した期間と、ロンドンに戻った後も継続し続けた。この膨大な未完成の作品の一部は、後に他の二つの預言書、『ミルトン』と『ジュルーサレム』に転用されている。

ブレイク一家がフェルパムの家を出てウィリアム・ヘイリーの庇護から離れた後は、オックスフォード通りから外れたモルトン通り南17番地にある建物の1階の2室に居を移した。そしてそこで1804年に2つの偉大な詩的「預言書」の構想を得て執筆を始め、その後の16年間の歳月を費やすこととなった。『ミルトン 2つの書からなるひとつの詩』は1804年から1808年の期間に書かれ、彫版された。そして『ジュルーサレム』は1804年から1820年の期間に書かれて、彫版に付された。偉大な幻想の詩『ジュルーサレム』が完成したその年、ブレイク一家はサウス・モルトン通りからストランド通りから少し外れたファウンテン・コート3番地へと最後の転居をしている。そこでブレイクが亡くなるまで二人は暮らしていた。

ここで紹介した「作品」の概要は選別したものである。サー・ジョッフリー・ケインズのオックスフォード版『ブレイク：全著作集』やアードマンとスティーブンソンによるロングマン出版の『ウィリアム・ブレイク全詩集』をのぞいて見ると、様々な場面で書かれた詩行連や、警句的表現、そして他の散文などに加えて、トーマス・バッツや他のパトロンや友人宛の手紙の中に書かれた数多くの他の詩作品や、ノートに記された彫版されることがなかった他の詩行と出会うことが出来る。

英文学におけるブレイク

ウィリアム・ブレイクは確かに独特の個性を持ち、彼自身の時代の一般大衆からは殆ど無視されていた人物であった。サミュエル・パーマーと「古代人」たちの熱意にも拘らず、ブレイクの才能に対する正当な評価は1863年のアレクザンダー・ギルクリストによる『ブレイクの生涯』の出版を待たなければならなかった。そして、ブレイクの信条の支持者となったD. G. ロゼッティ(1828-82)やA. C. スインバーン(1837-1909)などの後期ビクトリア朝の伝統に囚われない作家たちの助けによって徐々にその勢いをつけていった。1860年代以降、ブレイクの名前は文学界では次第に知られるようになっていったが、彼の詩自体は詩の全集が現れるまでは比較的注目されることはなかった。1895年にE. J. エリスとW. B. イェーツがブレイクの詩集を出版し、Dr. ジョン・サンプソンとサー・ジョッフリー・ケインズの詩集(それぞれ1905年、1925年に出版)が、以前の詩集には欠けていた学問的な正確さを備えた基準を確立した。しかし、長編の預言書はサンプソンの詩集には含まれていなかった。全集が出版されるには1920年代まで待たねばならなかった、詩人の死後一世紀が経過していた。

ケインズ、ジョセフ・ウィクスチード、デイビッド・V・アードマン、ノースロップ・フライ、S.

フォスター・デモン¹⁹の研究がブレイクの詩作品と彼の理念に対する評価と関心をますます高め、その結果、21世紀初頭には英国の最も偉大な詩人の一人としての彼の地位は確立されていた。

ブレイクの作品を比較論的立場に立って議論することは非常に難しいとされている。今後議論する他の「ロマン派詩人」との類似点は偶然の産物であり、彼の死後長期間に渡って世界が彼の作品と出会うことがなかったという単純な理由で、ブレイクをいずれかの動向の一部として捉えようとするのは曲解と言わざるを得ない。影響関係を検討する時、ブレイクは自学自習の人物であり、世に知られることがなかった作家であり、殆ど孤立状態の中で仕事をしており、彼の理念の多くはかなり時代を先んじていたことを忘れてはならない。ブレイクへの主な影響は彼の同時代人や直前の先人たちではなく、ダンテの『神曲』やミルトンの『失樂園』や『聖書』、そしてシェイクスピアの作品という昔の文献であった。ブレイク自身の理念ははるかに離れた未来と繋がっており、相互に異なるそしてブレイク自身ともかなり異なる人物、マルクス、フロイド²⁰、ロレンス、イエイツ、ショーとの比較を可能にしている。これらの理由をもって、本章では広範囲な分野における意味のある評価を行ったり、その先鞭をつけることも出来ないが、ブレイクと「ロマン派詩人」に関する簡潔な議論に限定せざるを得ない。

「ロマン派」詩人としてのブレイク

本論ではブレイクの「ロマン派詩人」としての特質に関する議論を導入するに際し、彼の詩とワーズワースとコールリッジの作品に限って比較することにその目的を限定している。「英国ロマン派詩」はその探求に関心のある読者にとって実に膨大な分野である。本研究領域内で十全に扱うには余りにも広範囲に渡り、議論百出の課題である。従って、ここではブレイクにとって同時代の「ロマン派詩人」である2人についてのみ言及する。

ウィリアム・ワーズワース²¹とサミュエル・テイラー・コールリッジは1798年に共作の『抒情詩集』を出版し、1800年に有名な序文をつけて第二版が世に出ていた。両詩人は『無垢と経験の歌』を読み、コメントを残しており、コールリッジはブレイクと面識があった。コールリッジは読んだ『無垢と経験の歌』の版には批判的であったが、それは主にデザインが気に入らなかったためであり、幾つかの詩作品に関しては肯定的な評価をしていた。しかし、どの「ロマン派詩人」もブレイクが彼らと目的を共有し、同じ文学運動の仲間であると考えている節はなかった。

一方で、詩に関して彼らが共有していたテーマと関心の幾つかをあと知恵ではあるが特定することが出来る。特に彼らの全員が「ヴィジョン」と「想像力」の理念に関心を持っていた。彼らすべての詩人が幼少期と無垢を重要なテーマとして活用していた。彼らは皆、自然に関する新しいそして急進的な考えを生み出していた。そして、より一般的で活力ある言葉を利用することで詩を再生出来るという信念を共有していた。これらの課題の一つ一つに関して簡潔にまとめておこう。

第1部で知覚に関する異なるレベルと「ヴィジョン」に関するブレイクの理念について検討し

てきた。ライカの両親は、ライオンが「黄金で身を固めた精霊」として姿を現したヴィジョンの瞬間にやっと抑圧的な恐怖心による目隠し状態から脱することが出来たことを想起しよう。また、「経験の歌」の煙突掃除の少年の幸福感は彼の両親の理解を超えていたこと、そして『天国と地獄の結婚』の中で、すべてのものが「有限で、腐敗している」のではなく、「無限」の状態にあることが明らかとなるように、「知覚のドア」が「洗浄される」ことをブレイクが求めていたことも思い出しておこう。そしてブレイクは以下のように主張していた。

というのは私の目には2重のヴィジョンが見えている
そして2重のヴィジョンは常に私と共にある²²

「ヴィジョン」に関するブレイクの理念は明らかに彼の信念にとって根本的なものであり、つまり、それは人々の「心の鎖」である精神の牢獄からの解放を可能にしてくれる能力であり、彼らの固い殻で覆われた自己、つまり「自我」を打破し、滅却することを可能ならしめる能力であり、自分自身を再生し、「神である人間の想像力」によって無限の世界への自己の解放を可能にしてくれる能力である。想像力溢れる視覚というもう一つの在り方はまた、ワーズワースやコールリッジの信念にとっても根本的なものであった。『序曲』（副題として「一人の詩人の精神の成長」）の中で、ワーズワースは彼自身の成長過程におけるヴィジョン豊かな瞬間の重要性を記している。幼少期より彼は「大空が大地の空とは思えなかった」時期を覚えている。そして、

馴染みのある形は何も残っていなかった、
樹木や、海や、大空や、緑の野原の様々な陰影も無くなっていた。
巨大で力溢れる様式しかなかった、
それは生きている人間の様子はなく
精神の中をゆっくり移動していた.....

（『序曲』第1巻, 395-9行）

ワーズワースはヴィジョンの能力が彼の精神と魂に滋養を与えたと論じている。そしてアルプスを縦走した際に、若者として体験したヴィジョンの瞬間の解説では、彼の信念の中で「想像力」とヴィジョンが占めていた重要な位置を強調している。

想像力——人間の言葉の未熟さゆえに
ここではそう呼ばれているが、
あの恐ろしい力が精神の深淵から
出自の分からぬ霧のように立ち現れた

あの奪い取るような力と、恐ろしいまでの予言の
啓示——その時感覚の光は消え、
直ちに孤独な旅人を覆いつくし、私は道を失っていた。
突き進む努力をすることなく立ち止まり、
私は自分の意識ある魂に言う
「あなたの威光を認めましょう」と。
替わって閃光が不可視の世界を啓示する、
そこには偉大なものが住む。

(『序曲』第6巻, 592-602行)

ここでは「ヴィジョン」に関するブレイクの概念の特徴の幾つかを確認することが出来る。ワーズワースはヴィジョンが普通の、物理的な視覚とは異なり、別物であることに同意している。「感覚の光が/消え」る時、「見たこともない形が」見えてきた。明らかに彼はヴィジョンと一つの偉大な「力」、そして彼の「魂」と同一視している。そして、想像力の能力が「(彼の魂の) 栄光を認識する」手助けをしているのである。最後にワーズワースはヴィジョンのこのような瞬間は人間性の大きい創造の瞬間であるという点でブレイクと見解が一致している。正にブレイクが彼の「瞬間」を無限の力と影響力の根源としているように、ワーズワースは「想像力」を以ってして「偉大さが存在する」と主張している。

というのはこの期間に詩人の仕事がなされ、
そして時間のすべての大いなる出来事がそういう期間に動き出し
そして考えるつかれるからだ
一瞬のうちに、……²³

コールリッジもまた、偉大な力と重要性をヴィジョンと想像力に与えていたことは疑いの余地がない。「クープラカーン」と題する素晴らしい詩はヴィジョン豊かな夢の記憶で始まり、その夢の断片は、彼の睡眠中に語られた長い詩の一部であるとコールリッジは語っている。「クープラカーン」の第2部ではそのヴィジョンと関連した魔力について思いを巡らせている様である。コールリッジはその瞬間、想像力溢れる力を持っているという「深い喜び」で満たしてくれるので、そのヴィジョンの再生を切望している。

……高く、長い調べで
あの空中楼閣を建てるだろう
あの陽光のさす快樂宮だ！あれらの氷の洞窟だ！²⁴

「クーブラカーン」の中でコールリッジが生み出した想像力溢れる力は、詩人を他の人にとっては魔力を持つ恐怖の人物へと変貌させ、慣習に凝り固まった社会に衝撃を与え、震え上がらせるような狂気じみた占い師、あるいは預言者を思い起こさせる人物へと変貌させた、ブレイクの著作ではある時には「リントラ」と呼ばれる人物である。コールリッジはそのような詩人に対する一般大衆の反応を次のように記している。

みんな叫ぶであろう、気をつけろ、気をつけろ、
あのきらきら光る眼、あの流れ乱れる髪、
あいつの周りに輪を三重に描き
聖なる恐れを胸に眼を閉じるのだ、
あいつは神々の召される甘露を味わい
天国のミルクを飲んだのだから。²⁵

第1部では両極端の接合、つまり高揚した感情の状態はブレイクにおいては重要な意味があり、それはヴィジョンと密接に関係していることに着目した。「見つかった少女」の中でライカの両親は極度の恐怖心のおかげでヴィジョンへと導かれていった。また、「虎」の中で詩人が表現した衝撃、「子羊を造ったお方が汝を造られたのか?」、そして地獄の箴言、「過剰な悲しみに笑い、過剰な喜びに涙する」を思い起こしておこう。コールリッジが「陽光さす快樂宮!」と「氷の洞窟!」を並置し、恐怖(「気をつけろ!」)と「天国のミルク」を組み合わせることで、ヴィジョンの瞬間の潜在的可能性を表現しようとして、二人の詩人は同じような、逆説的感情の状態を探求していたことを示唆している。これら3人の詩人は想像力豊かな体験は言語と合理性の壁を打ち破り、ワーズワースが言っている「人間の言葉の悲しい未熟さ」を暴露している点では3者の見解が一致しているように思える。

これまで幼児期と無垢に関するブレイクの理念の重要性については多々検証してきた。例えば、「子羊」や「愛の園」を読解してきたが、この両詩は明らかに幼少期は祝福された時期であり、『無垢と経験の歌』の基本的テーマは成長の過程であり、その中でヴィジョンと喜びから人は切り離され、悲しいことに物質主義と慣習という「足枷」を嵌められ、自らの精神を囚われの状態に至っているのである。ワーズワースの「幼少時の回想から受ける霊魂不滅の啓示」からの詩行は自明の内容であり、ブレイクの世界観に対応するテーマと信念を鮮明に宣言している。

忘れ去りもせず、
露な裸身でもなく、
栄光の雲を棚引かせて生まれ出るわれわれの
ふるさとは神、

幼子を包み込む天上。
 牢獄の影が垂れ込めるのは
 育ち行く少年、
 それでも少年は
 栄光の光とそれがいずこから射すかを知り
 嬉々として光を見る。
 若者となると、日々、東から遠ざかる
 旅を強いられるが、いまだ自然の司祭であり、
 光輝く光景に
 道すがら伴われている。
 ついに大人ともなれば、栄光の光は失せ
 日々の光の中に融け入る。²⁶

この引用詩行は幼児期の想像力の神聖さと力強さに寄せる信頼の明白な宣言文であり、ブレイクの理念と密接に関係しうる「経験」の世界への、そして「監獄」のイメージへの没落の物語を語っている。ワーズワースは彼の「詩人の精神」の「成長」の基盤は、『序曲』の中で、少年期初期に体験した一連のヴィジョンであったことは既に確認したとおりである。

ブレイクと『叙情詩集』を著した二人の詩人との間に密接な関係性を見出し、彼らが幼少期に関するテーマを同じように活用していたことを示すことは容易なことであった。しかしながら自然に関するテーマはこれ以上に複雑な課題であり、ここではそのテーマに関する3人の詩人のそれぞれ異なる展開について検討する十分なスペース的余裕はない。自然は3人の詩人全員の作品において基本的なテーマであることを指摘し、「自然の詩人」ワーズワースが山岳や、川や滝、森林や谷間などを眺めて時間を過ごしたと言う一般的な誤解に注意の眼を向けておくことで、ここでの目的には十分であろう。

ワーズワースは確かに自然溢れる場で多くの時間を過ごした。観光産業が常に喧伝するように、彼は英国の湖沼地方に居を構えていた。しかし、『序曲』や『叙情詩集』を丹念に読んでみると、ワーズワースは更なる目的のためにのみ自然に関する沈思黙考を重ねていた、つまりヴィジョンの瞬間を養い育てるためにそうしていたことが繰り返し確認できる。ワーズワースの詩に見られる大文字のNで始まる「自然」の概念は、物理的感覚や風景の物理的美とは殆ど無縁である。その「自然」は精神的、道徳的な力なのである。彼は五感が封じられてしまう瞬間に繰り返し着目している。つまり「馴染みのある形」は姿を消し、「感覚の光は消え」る。その時、彼は「生きている人間とは異なる生を持つ巨大で大いなる姿」で溢れた「眼に見えない世界」を、物理的の五感とは異なる、精神的な方法で知覚しているのである。そのような時、ワーズワースは自然を見ていると言うよりは、自然を通して詩人が「自然」と呼んでいる霊的な存在に視線を合わせてい

るのである。

ブレイクと彼の同時代の二人の「ロマン派」詩人と共通の基盤を見極めると、そこにはもう一つの自然のテーマの一面が見えてくる。3人全員が、当時、支配的になってきた慣習的な調和と均斉という理念に対する反発の中で自然の概念を発展させているように思える。節度と優しさを強調する慣習的な価値観と、例えば18世紀の風景的庭園の技法に見られるように、調和という限定の中での自然の変貌とは対照的に、検討の対象となっている3人の詩人全員は自然の力や野性性や自然の豊穡を強調していた。

第2章で『無垢の歌』の世界における「田舎風の」風景について議論した際に、「序詞」,「羊飼い」,「子羊」の田舎の設定では同様に、意図的に自然の一部が提示されていることを指摘した。『無垢の歌』で夢に現れた単純素朴な「天国」(例えば、「煙突掃除の少年」のトム・ダクレや「夜」の話し手による)と一緒に、『無垢の歌』の自然の風景は殆ど慣習的な趣向のパロディーとなっている。つまり、「虎」の詩の中で探求している力や恐怖を排除し、人の手に飼いならされた限定的な自然なのである。ブレイクは明らかに『無垢の歌』の自然風景と限定された偽りの「天国」観を同一視している。

ワーズワースはまた荒々しい過剰な自然の勢いに焦点を当て、彼の自伝的な『序曲』は彼の山間の家の危うさや危険の元をどのように探し出したかを繰り返し述べている。そこで、巣からそつと抜け出し、

おお！滑りやすい岩の
わずかな隙間に足をかけ、草むらの傍の
大カラスの巣の上に身を乗り出し、
グラグラしながらも、
強風に支えられ（そう思えたのだが）、
むき出しの崖壁を背にして、おお、その瞬間、
危うい岩場で私は一人で体を支えていた...

(『序曲』第1巻, 330-6行)

自然の単なる美しさや調和はブレイクにとってそうであったように、ワーズワースにとっても部分的な見方でしかなかった。そしてワーズワースは更に、彼の魂の成長と方向性について、「一部、その必要な一部」を形成し、生み出した力として恐怖の重要性を強調している。彼は自分が「美と恐怖によって養育され」て成長したと述べ、彼の創造力溢れるヴィジョンを形成した「苦痛と恐怖という巣」について言及している²⁷。

同様に、3人はそろって気取った、装飾的な詩の文体に反発する中で作品を書いていた。詩の言語は装飾的であるべきという考えを彼らは拒否し、より一般的な「声」を追求していた。ワー

ズワースは『叙情詩集』の序の中で、詩的言語の活力ある一般的な根源を再生するという目的を、あたかも改革の宣言であるかのように述べている。彼は「庶民の田舎の生活」に題材を好んで求めている、なぜなら、庶民はこのような状況の下では、「社会的な虚栄心から解放され、単純素朴で無作為な表現で自分の感情や考えを伝える」一方で、「…本質的な情熱がより平明でより力溢れる言語を語っているから」と主張している。さらにワーズワースは単純化した詩的表現で彼の信念を表明し、平明さとその時代に慣例的に詩人に期待されている特質を弁別して、次のように述べている。

……繰り返された経験と普通の感情から生まれ出る言葉というものは、移ろい易い好みや自分自身の創造に関する移ろい易い欲求の餌食となるために、自分自身を人間の心情から切り離し、恣意的で気まぐれな慣習的な表現に浸るほどに、自分自身とその芸術に栄光を授けていると考える詩人たちが頻繁に取り違えている言葉よりも、普遍的なものであり、遥かに哲学的なものである。

(Wordsworth and Coleridge, *Lyrical Ballads*, ed. R.L. Brett and A. R. Jones, second edition, London and New York, Routledge, 1991, pp. 245-6)

ブレイクが彼の「ロマン派」の同時代詩人と空疎な装飾的な詩的表現に対する侮蔑感を共有していたことは、明らかに『無垢と経験の歌』に見られる彼自身の文体の平明な力強さから窺い知れる。しかしながら、ブレイクの見解を表明している彼の著作を見てみると、ワーズワースの宣言文に見られる若干弁解めいた思いよりも、より直接的で辛辣な文体で表現されていることが分かる。

イギリスでの問いはある人が才能を、そして天才的能力を持っているかどうかではない。そうではなくて彼が受動的で洗練されていてそして有徳な駄馬で、そして貴族たちの意見に芸術と学問の点で従順であるかどうかである。もしも彼がそうならば、彼は立派な人間ということになり、もしそうでないならば彼は飢えた生活を送らねばならない。²⁸

さらに、

……つまらぬ染み、あいまいな、又はつまらぬ
脚韻、またはつまらぬ諧調の飼いならされた高度の仕上げ人によって投げられる、
そういう者は破壊するために国家の統治機関の中に毛虫のように這って行く²⁹

『叙情詩集』の中でワーズワースが著した作品の多くは、慣習的な典雅な文体からの根本的な離脱を意図したものであったが、今日の読者にとっては気取った文学的な文体に思える。庶民の言語の再生という点では、ワーズワースよりブレイクがはるかに多くの功績を残したと論ずる者も多くいると思われる。「煙突掃除の少年」における語り手の声に読み取られる自然主義的傾向を見ておこう。

子羊の背中みたいに巻き毛のちびのトム・デイカは
髪を剃られたとき泣いた。ほくは言ってあげた。
「泣くなよ、トム。気にするな、坊主頭になれば
おまえの白い髪の毛は煤によごれないよ」

それから「聖木曜日」における怒りの直接的表現を見ておきたい。

これが聖なることなのか、
富んで実り豊かな国に
幼な子たちが惨めな状態にされ、
冷たい強欲な手で育てられるのを見ることか。

あの震えわななく叫びが歌なのか。
あれを喜びの歌といえるのか。
そしてあんなに多くの子どもが貧しいのか。
ここは貧困の国だ！

ブレイクがこの詩の第2連でしているように、一つの連を疑い深い憤りを示す4つの別々の鋭い表現に分割する勇気をワーズワースが持っていたとは想像し難い。ワーズワースがあまり「文学的」ではない表現を見出し難かったこと理由は、彼自身が表現しようと切望していた「身分の低い、田舎じみた」庶民タイプの出身ではなかったことによるのである。そして、ブレイクが感じたことを力強く、直截に表現せざるを得なかったように、ワーズワースはケンブリッジ大学の卒業生のように執筆せざるを得なかったのであった。

これまでの検討では、ブレイクと二人の同時代の「ロマン派」詩人が共有していた関心と信念の共通分野に限定してきた。しかし、「ロマン派」という用語は文芸批評の議論において長く続いている論争と検討の対象となってきた。これまで「ロマン派詩人」という表現を巡って数百の定義が試みとして提出され、その一つ一つがそれ以前の定義と完全にあるいは多少異なったものであった。これらの定義の多くは「ロマン派」の哲学と「物質主義者」の哲学の違いとこの詩的

運動を結び付けようとしたものである。この文脈においてブレイクに関して指摘しておくべきもう一つの点がある。ブレイクは確かに「ロマン派」の詩人であり、物質主義には敵対する立場をとっている。彼は物質世界の領域を超えた力、様式、本質、存在の認識を繰り返し強調している。そして五感による限界を断固として拒否している。『天国と地獄の結婚』において感覚的な知覚は「(人間の) 洞窟の狭い隙間から」見ることと表現され、ブレイクはこれらの限界を超越することを唱導して、次のように語っている。

.....どうか神様、我々を
単一のヴィジョンとニュートンの眠りから救いたまえ。³⁰

これまでの「ヴィジョン」と「想像力」に関する議論は、ワーズワースとコールリッジはこの意味において両者ともまた「ロマン派」詩人であったことに疑いを挟む余地がないほど実証していると言える。

これまでの簡潔な議論を通してブレイクを「ロマン派」詩人の一人として見なすことは可能であり、ブレイクと他の「ロマン派詩人」とのテーマと情緒面における幾つかの類似性は明白であることが確認された。しかしながら、ブレイクと同時代の詩人との驚くべき相違にも同様に気づいている読者もいることだろう。例を挙げれば、ブレイクの政治的洞察ほど痛烈で急進的なものはワーズワースやコールリッジには全く見られない。また、ブレイクの作品に見られる詩人や預言者の役割と、ワーズワースの「自然の司祭」としての詩人の概念との関連性は殆どないといえる。この両者の溝はワーズワースの「詩集」に書き込まれたブレイク自身による走り書きの中で表現されている。

自然崇拝なるものは存在しない、何故なら自然のままの人間は神と敵対しているのだから。³¹

注：

- 1 本書ではAlexander Gilchrist著*The Life of William Blake*(London, 1863 and 1880), Mona Wilson著*The Life of William Blake*(London, Nonseuch Press, 1927, Geoffrey Keynesによる再版, London, Oxford University Press, 1971), Peter Ackroyd著*Blake*(London, Sinclair-Stevenson, 1995)が代表的伝記作品として掲載されている。2001年にG.E.Bentley, Jrが最新の研究成果を踏まえ、*The Stranger From Paradise: A Biography of William Blake*(New Haven and London: Yale University Press)を著した。特に本章で扱っているブレイクの友人かつパトロンといわれる支援者(George Cumberland, John Flaxman, Henry Fuseli, Thomas Stothard, Thomas Butts, Joseph Johnson, John Linnel)に関する新しい事実を提供している。また、巻末には1806年から1988年までに出版されたブレイクの主要な伝記作品のリストと評価をまとめている。
- 2 ロンドン市内のバーヒル・フィールズ公園内にブレイクの記念碑的墓石はあったが、正確な埋葬地は特定されてはいなかった。近年ガリド夫婦の1年間に渡る調査の結果、ブレイクの正確な埋葬地が特定された。現在、ブレイク協会が中心となって現在の墓石から約20メートル離れた最終的な休息の地に記念碑を建立する計画が

進行中。www.blakesociety.org/blakes-grave/(2016)

- 3 設立から10年目のRoyal Academy of the Artsに作品の審査を受けて入学したことは、ブレイクが職人としての彫版画師に留まらず、芸術家としての野心を持っていたことを示していた。
- 4 梅津斎美訳『ブレイク全著作』第1巻、名古屋大学出版会、1989年、372ページ。
- 5 Alexander Gilchrist *The Life of William Blake* (New York:Dover Publications, INC., 1998), p.36.
- 6 しかし、これらの見解は憶測の域を出ず、最近の研究でもそれを裏付ける資料は見つかっていない。むしろ、G. E. Bentleyが指摘するように、ブレイクの生活圏で巻き起こった暴動騒ぎ、略奪、放火の体験が、彼の詩における“burning”, “fire”, “flames”などのイメージ、そしてブレイクの黙示録的ヴィジョンの原型の一部となったと考えられている。G.E. Bentley Jr. *The Stranger From Paradise:A Biography of William Blake* (New Haven: Yale University Press, 2001), p. 57.
- 7 フランス革命を扱っているこの議論の中で、ブレイクの *The French Revolution* (1791) に言及しない理由は判然としませんが、以下のDavid V. Erdmanの指摘には留意しておきたい。

Blake's *French Revolution* has unique importance as the only one of his visions or prophecies in which the historical particulars are clear and explicit, and it must be observed that scholars who neglect even to consider this work among Blake's "prophetic writings" are neglecting the most available key to the historical symbolism of such later books as *Europe* and *The Four Zoas*.

David V. Erdman *Blake:Prophet Against Empire:A Poet's Interpretation of The History of His Own Times* (New York:Doubleday & Company, 1969), p. 165.

- 8 'Voltaire' と並ぶ18世紀フランス最大の思想家。人間は自然状態において自由かつ幸福であり、文明の発達は道徳的墮落と社会的不平等を招くがゆえに、自然へ回帰することによってのみ救われるという彼の根本思想は、フランス革命をはじめロマン主義文学など、文芸・思想に与えた影響はきわめて大きい。上田和夫編『イギリス文学辞典』研究社、2004年、265ページ。
- 9 急進思想家。Quaker教徒の家に生まれ、税取士になったが、賃上げ要求運動に係わったため解雇され、1774年Benjamin Franklinの勧めで渡米し、アメリカの独立に思想的根拠を与えた政治パンフレット *Common Sense* (1776) を出版。87年にイギリスに帰り、E. Burkeの *Reflections on the Revolution in France* に反対して、君主制を否定する内容の *The Rights of Man* (2部、1791, 92) を著し、そのために逮捕されるところを渡仏。フランスでは市民権を得、国民議会に選出され、*The Age of Reason* (1794, 95) を執筆し理神論を主張。『イギリス文学辞典』264ページ。
- 10 1789年10月10日付けの手紙より引用。また、第6章で言及しているバークの'virtual representation' も参照。
- 11 最近の研究でブレイクの母親Catherineの出自が明らかになってきた。一般の学校に通学した経験のないブレイクが、古典に通じ、神秘主義的思想を抱くようになった経緯に関しては自学自習だけでは説明がつきづらいう疑問が研究者の中であった。Bentleyも以下のように推察するしか術がなかった。

Perhaps his mother nurtured her strange son's passion for poetry as she had his delight in drawing. Certainly nothing we know of his pence-counting father suggests a love of literature. The volumes of Chaucer and Shakespeare and Milton over which the boy pored may have come from her family... Blake's impressive, indeed prodigious self-education may have been protected and encouraged by his mother. (*The Stranger From Paradise:A Biography of William Blake*, p.26)

アーミタジ姓であったブレイクの母親がモラビアン教会の一員であり、ヨーロッパの文化的伝統にかなり通じていた女性であったことが判明した。

The association of the Armitages and Blakes with the Moravians provided them with an unusual—even unique—access to an international network of ecumenical missionaries; an esoteric tradition of Christian Kabbalism, Hermetic alchemy and Oriental mysticism; an European 'high culture' of religious art, music and poetry; and a supportive political environment for opposition to current government

- policies. Significantly, their participation occurred during the 'Sifting Time'(c. 1743-53), the most controversial, turbulent, creative and artistic period of Moravian history. Marsha Keith Schuchard *Why Mrs Blake Cried: William Blake and the Sexual Basis of Spiritual Vision* (London: Century Random House, 2006), p.14.
- 12 On Peckham Rye (by Dulwich Hill) it is, as he will in after years relate, that while quite a child, of eight or ten perhaps, he has his "first vision." Sauntering along, the boy looks up and sees a tree filled with angels, bright angelic wings bespangling every bough like stars... . Another time, one summer morn, he sees the haymakers at work, and amid them angelic figures walking. (Alexander Gilchrist, pp. 5-6.)
- 13 The phrase commonly employed by psychologists for such phenomena is 'eidetic imagery', and textbooks supply numerous instances of hallucinatory images that 'are always seen in the literal sense': they are not memories, or afterimages, or daydreams, but real sensory perceptions. In the late nineteenth century, Francis Galton noted that this faculty 'is very high in some young children, who seem to spend years of difficulty in distinguishing a subjective and objective world'. (Peter Ackroyd, *Blake*, p.35)
- 14 『ブレイク全著作集』第1巻, 280ページ。
- 15 Through Fuseli, Blake probably came to know Johnson well, for Fuseli was a member of the inner circle of Godwin, Paine, Mary Wollstonecraft, Priestley, and most of the effective intellectual radicals of the day, to all of whom Johnson was a generous publisher and a kind friend. (Bentley, p.55)
- 16 Mary Wollstonecraft (1759-97): 女権思想家・小説家。早くから貴族の家庭教師や文筆で生計を立てる。フランスでアメリカ人 G. Imlay と同棲, 一女 Fanny を産み, 1797年に急進思想家 Godwin と結婚, のちに Shelley 夫人となる Mary を出産した直後, 産褥熱で死す。主著 *A Vindication of the Rights of Woman* (1792) は女性解放思想の先駆者として彼女の名を不朽にした。『イギリス文学辞典』386ページ。
ブレイクは彼女の作品 *Original Stories from Real Life* (1791) のために彫版していた。
- 17 *William Blake: The Complete Illuminated Books* with an introduction by David Bindman (London: Thames & Hudson, 2000), 130.
- 18 Marsha Keith Schuchard 著 *Why Mrs Blake Cried: William Blake and the Sexual Basis of Spiritual Vision* (London: Century, 2006) によって sexuality と vision の関係性が見直され, 様々な研究が行われている。Helen P. Bruder と Tristanne Connolly が編集した *Sexy Blake* (London: Palgrave Macmillan, 2013) の中で, sexuality の観点からの研究成果として女性研究者の業績を挙げている。Mei-Ying Sung (*The Art of Engraving*, 2009), Susanne Sklar (*Visionary Theatre*, 2011), Laura Quinney (*Self and Soul*, 2009), Sara Haggarty (*Blake's Gifts*, 2010), Sibylle Erle (*Blake, Lavater and Physiognomy*, 2010)。
- 19 ブレイクに関するこれらの解説者による影響力ある批評業績は次の章で簡潔に検討されている。彼らの業績一覧は「今後の読書リスト」に掲載されている。
- 20 Diana Hume George *Blake and Freud* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1980), Brenda S. Webster *Blake's Prophetic Psychology* (London: The Macmillan Press, 1983) がフロイトと心理学の観点からブレイクを分析, 解釈した先駆的業績である。
- 21 ブレイクの『無垢と経験の歌』とワーズワースの『抒情詩集』の関連については次の研究が詳しい。Heather Glen *Vision & Disenchantment: Blake's Songs & Wordsworth's Lyrical Ballads* (Cambridge: Cambridge University Press, 1983)
- 22 梅津斉美著『ブレイクの手紙』八潮出版社, 1970年, 86ページ。1802年11月22日付け, トマス・バッツ宛手紙に書かれた詩行より。
- 23 『ブレイク全著作集』第2巻, 927ページ。
- 24 上島建吉編『対訳コウルリッジ詩集—イギリス詩人選(7)』岩波書店, 2002年, 200~201ページの翻訳を参照。
- 25 『対訳コウルリッジ詩集—イギリス詩人選(7)』202~203ページ。
- 26 山内久明編『対訳ワーズワース詩集—イギリス詩人選(3)』岩波書店, 1998年, ページ110~113。
- 27 すべての引用詩行は『序曲』第1巻からである。
- 28 『ブレイク全著作集』第2巻, 810ページ。
- 29 『ブレイク全著作集』第2巻, 961ページ。

30 『ブレイクの手紙』90ページ。

31 From Annotations to Wordsworth's Poems: London, 1815. *The Complete Poetry and Prose of William Blake*, p. 665.

(みやまち せいいち 札幌学院大学人文学部教授 イギリス文学専攻)